報告１：大濱慶子（神戸学院大学）

中国の社交ダンスの発展と 1950 年以降の大衆文化の再生

中国は社交ダンス大国である。世界屈指の社交ダンス人口を擁し、愛好家の下支えによって北京舞踏学院や北京体育大学など舞踏やスポーツを専門とする大学においてプロ養成が進んでいる。世界最高峰のダンスの祭典―イギリスのブラックプール・ダンスフェスティバルでも毎年中国人ペアの活躍がめざましい。

社交ダンスの特徴は男女が一対になって抱擁しながら踊るペアダンスという点にある。前世期に形成、信奉されたロマンチックラブ（異性愛）言説や近代家族観が底流をなしている。東アジアにおける起源は、近代、開港場に移り住んだ西洋人によって舶来文化として移入された。日本では明治期、国を挙げて華々しい鹿鳴館舞踏会が催され、アジアの近代化の手本になった。社交ダンスの受容という点では日本が先行したが、これを息の長い大衆文化へと大きく発展、開花させたのは中国であった。それを解明する鍵は社会主義建設初期の試みにあると考える。1950 年代以降、中国に社交ダンス旋風が巻き起こり、凄まじい勢いで全国各地の工場、部隊、政府機関に広がっていったという。この時期についてはあまり研究が行われていない。

報告者は2015年より中華民国期と中華人民共和国期の二つの時代に出版された中国の社交ダンス本の収集、比較分析に取り組み、2017 年 3 月、上海で新たに資料調査を行った。これらの調査を踏まえ、本報告では、近代中国社会において「交際舞」と呼ばれていた社交ダンスが中華人民共和国期「交誼舞」と読み替えられていく過程、具体的には営利目的の「舞庁」（ダンスホール）、「舞女」（女性ダンサー）が廃止され、「単位」のレクリエーション部門が管理する非営利的な「舞会」に置き換えられ、社会主義的改造の下で大衆娯楽文化の再創造が行われる過程を検証する。1950 年代以降の社交ダンスの再創出と知識人、労働者を新たな構成員とする都市部上中間層の再編、彼らのアイデンティティーの再構築、生産性の向上との関わりや男女の力学の変化、集団言説と対言説の関係などを探り、またそれが時代を超えて現代中国社会にどのような形で存続、再生されているのかを考察する。